

ガイドという職業の誕生：世界遺産登録後の屋久島における暮らしと観光

中島, 成久

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Intercultural Communication, Hosei University
Ibunka / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

131

(終了ページ / End Page)

149

(発行年 / Year)

2007-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004519>

ガイドという職業の誕生

——世界遺産登録後の屋久島における暮らしと観光——

中島成久

(法政大学国際文化学部教授)

目次

- 1 世界遺産登録後の屋久島の状況
 - 1-1 人口の微増
 - 1-2 観光客の増加

- 2 町認定ガイド構想の挫折
 - 2-1 ガイド業の発生
 - 2-2 町認定ガイド構想の挫折

- 3 登録・認定ガイド制度の出発
 - 3-1 「エコツーリズム推進」と登録・認定ガイド制度
 - 3-2 登録・認定ガイド制度の問題点

- 4 屋久島ガイドの未来——提言

1 世界遺産登録後の屋久島の状況

1-1 人口の微増

1992（平成4）年12月、屋久島は日本で最初の世界遺産（自然部門）に登録された。世界遺産登録から、約15年。屋久島をめぐる状況は大きく変わった。

まず、屋久島という名前が日本中で認知され、高度経済成長下の日本の地方、離島において進行した過疎化に、屋久島では歯止めがかかった。屋久島の人口は高度経済成長直後の昭和35（1960）年の24,010人をピークにして下がり続け、1994（平成5）年に過去最低の13,455人を記録した。しかし、その後は微増に転じ、2003年（平成15）年には13,790人に達し、今後もその傾向が続くと思われる¹。

人口増加の主要な要因は、屋久島への移住者の増加と、若年層が島での生活を選ぶという傾向が増えたためである。移住者は二類型に分かれる。一つは定年退職後第二の人生を屋久島で過ごすために、比較的裕福な資金をもって移住してくる移住者と、他は、屋久島の自然に憧れて、生活のあてもなく住みつき、アルバイトでその日の暮らしをする若者層である。本稿の主題であるガイドという新しい職業を選ぶ人々は、こうして移住してきた若者層が多い。

移住者の増加は、島の内部で旧住民との生活感覚の違いからトラブルを引き起こすことが少なくない。また、都会の基準からすると「安い」島の土地を高値で買う傾向があって、その結果土地価格の上昇をもたらし、島の住民が条件のいい土地を買えなくなるなど、かならずしも島の住民には歓迎されていない。

これに対して、若年層が島に留まる傾向が強くなってきたことは、プラスと考えていいだろう。若年層が島に留まる原因の一つに、長期にわたる日本経済の低迷で、島の外で十分な就労の機会が得られないことが挙げられる。しかし、彼らが屋久島という名前に誇りを感じ、

そこでの生活に自信を持ち出したことも特筆していいだろう。過去の屋久島出身者が、島出身であることに引け目を感じていた時代があったことからすると、世界遺産登録によってこうした劣等感を払拭することができたのは、大きな貢献であろう。

1-2 観光客の増加

しかしながら、世界遺産登録はいい結果だけをもたらしてはいない。世界遺産登録直後の1994年に、鹿児島県は西部林道域の県道の拡幅工事計画を発表し、その後2001年計画が白紙撤回されるまで、屋久島内外で大きな論争を巻き起こした²。この論争は、「世界遺産指定地における開発と環境の調和」という問題に大きな影響を残した。その後、あからさまな開発志向は屋久島では影を潜めてきたが、観光（開発）という問題は、屋久島の環境と生活に無視しえぬ影響を及ぼし始めている。

観光客はこの数年間、年間の入り込み数が30万人以上で推移している。屋久島への観光客数は、高速艇「トッピー」が就航した1989（平成元）年を境に急増した。世界遺産登録前の1988（昭和63）年に12万人強だった数字が、1992（平成4）年に20万人を超え、1998（平成10）年には30万人を突破し、その後毎年30万人以上の入り込み数になっている³。こうした観光客の増加の背景として、世界遺産登録後の屋久島のイメージアップが大きな原因となっていることは間違いない。

観光客はゴールデンウィークとお盆の時期に集中し、また縄文杉、白谷雲水峡、屋久杉ランド、日帰りあるいは一泊二日の奥岳登山といったポイントに集中している。この数年ゴールデンウィークの4日目から一日当たりの登山者の数が4～500人を超え、2006年には8～9日目に900人近い登山者に達し、過去最高を記録した。この日縄文杉登山を案内したガイドさんは、「登山者が数珠つながりにつながっていた。

一人、二人追い越しても、前のグループがいるので、縄文杉を見るのは順番待ちであった。木道のない部分の木の根が浮き上がっているのが気になった」と語っていた。2006年も同じ傾向であったが、ピークの山が700人超であった⁴。

宮崎駿監督の「もののけ姫」（1997年）が屋久島の照葉樹林をモデルとして製作されたことはあまりも有名である。宮崎監督は「もののけ姫」製作以前にも屋久島を何度か訪れていて、自身の作品で森のイメージを描く際屋久島からのインスピレーションをしばしば使っている。しかし、公開初年度50万人以上の観客を集めたこの作品の成功で、「もののけ姫」の舞台設定のモデルとなった白谷雲水峡は、「もののけの森」として有名になり、今では縄文杉に継ぐ、屋久島第二位の観光スポットになった⁵。

また、NHK連続ドラマ「まんてん」（2002年放映）の舞台に屋久島がなったほか、屋久島の森をイメージした映画、広告はその後急増している。こうした中央マスコミの表舞台で屋久島が取り上げられる回数が増えるに連れて、屋久島への観光客は目に見えて増え、しかも弱年齢化してきた⁶。最近ではテレビのキー局の朝7時代の番組で、若い女性リポーターによる屋久島からの生中継があったりして、古い過疎の時代の屋久島を知る世代の度肝を抜く事態となってきた。

25,156人に実施した「行ってみたい国内の世界遺産」アンケートによると、1位 屋久島 56.7%、2位 知床 32.9%、3位 琉球 24.8%、4位 京都 19.7% となっている。このホームページには、「屋久島はまだ未体験。憧れますよね」というコメントが添えられている⁷。

こうした観光客の増加にともない、ホテル・民宿の数が目に見えて増えてきた。世界遺産登録後、屋久島での宿泊施設の数には約2倍に増えた。屋久島で発行されているコミュニティ誌の「生命の島」⁸第32号（1994年10月発行）に掲載されている「屋久島・口永楽部島（くちのえらぶじま）宿泊施設一覧」では、総数66軒の宿泊施設（ホテル、

旅館、民宿、ペンションなど）が紹介されている。その66軒のうち、世界遺産登録後開業した宿泊施設が5～6軒はある。ところが、同誌の第74号（2006年4月発行）では、90軒の宿泊施設が紹介されている。屋久島観光協会長の柴鉄生氏は、「民宿の数が100軒を超えた」と発言している⁹。

この宿泊施設の増加には、二つの傾向がみられる。一つは、岩崎ホテル、ホテルあかつき屋久島、JR ホテル屋久島などのような、大資本の資本参加で経営される豪華ホテルの増加である。岩崎ホテルは鹿児島県を代表する観光資本の経営で、「トッピー」などの屋久島への足を持っているほか、屋久島内部におけるバス、タクシー部門を持っている。こうした豪華ホテルは、当然値段が高いが、経済的にゆとりのある中高年層には人気があるようだ。

第二の傾向は、地元の住民による民宿経営の増加である。この手の民宿のグレードはそれこそ「ピンからキリ」までである。経営者のセンスを生かした木造の瀟洒なコテージ風のものから、一軒家の内部をベニヤ板で仕切っただけの粗悪なものまで多種多様である。

民宿の増加はさらに別の特徴を示している。それは、特に宮之浦、安房（あんぼう）といった飲食店が集中している地区¹⁰では、朝夜二食出す「まかない型」の民宿ではなく、「素泊まり型」の民宿が急増し、価格破壊が起きている¹¹。「素泊まり型」では食事を出す手間とコックが要らないため、手軽に民宿を始められる。

観光客が増えてくると、縄文杉などへの登山のほか、奥岳への無理・無謀な登山客が増えてきた。その結果、事故も急増するようになった。屋久島山岳登山のパイオニア太田五男氏によると、昭和31年～平成3年までの屋久島での遭難事故は50件で、そのうち死亡者が8人、行方不明者が6人である。ところが、世界遺産に登録された直後から事故が多発するようになった。平成4年の統計はないが、平成5年から11年までのわずか6年間に65件の事故が発生し、死亡者が11人、行方不

明者が12人という急増ぶりである。太田氏によると、屋久島での山岳遭難の原因は、①失道による遭難、②冬期疲労凍死、③増水により流される、④転倒による怪我が挙げられる¹²。

冬期の屋久島奥岳部は積雪が数メートルに達することもあり、「南の島だからたいしたことはないだろう」、という甘い思い込みで安易な登山をすることが多く、それが事故の増加につながっている、と太田氏は指摘している。

観光客の増加と事故の急増という現象が相乗して、屋久島におけるガイドへの需要が急増した。もともと屋久島にはガイドという職業は存在していなかった。奥岳登山の道案内、あるいはポーター的な人がいなかったわけではないが、それで生業を立てられるようなものではなかった。しかし、最近では、200人あまりの人が何らかの形で「ガイド」業に従事している¹³。中には300人くらいと推計する人もいる。人口1万4千人の島の人口のうち、1.5パーセントから2パーセントあまりの者が「ガイド」という仕事に就いているわけで、これは尋常な数字ではない。

なぜこんなにガイドの数が増えたのであろうか。そして、そこにはどんな問題があり、何が解決されなければならないのだろうか。

2 町認定ガイド構想の挫折

2-1 ガイド業の発生

屋久島の中にガイドという職業が生まれたのは、世界遺産登録の直前のことである。この頃は、大型バスで屋久島の主要ポイントを回るマス・ツアーの全盛時代であった。それは、大川（おおこ）の滝、千尋（せんびろ）の滝をバスで回り、自然休養林の屋久杉ランド（標高800～1000メートル）を30分ほど歩き、バスで行ける紀元杉（樹齢

3000年)では記念撮影を撮るだけといった、京都、奈良の観光地を巡るツアーと変わらない駆け足ツアーであった。

だが、こうしたマス・ツアー型の旅行に満足できない旅行者が屋久島にも出てきた。植物、動物、昆虫など屋久島の生態学的な特徴を専門家の説明を聞きながら歩くことや、ダイビングやカヤッキングなど、本格的な登山をしなくても、あるいはできなくても、屋久島の旅を満喫できる。そうしたコンセプトの下に、ガイド業は始まった。当時大型バスでは行けなかった白谷雲水峡(標高700~900メートル)の魅力が急速に評価されだしたのはこの頃である。また、大型バスでは通行できない西部林道域の魅力が強調されるようになったのも、この頃である。

ガイドの需要を後押ししたのが、前述した世界遺産登録後の事故の増加である。比較的安全だと思われる縄文杉登山でも、往復8時間以上の山歩きが必要なため、意外な事故が起きている。あるガイドさんの話では、「過呼吸、高血圧、太りすぎのため倒れるケースがある」という。

こうした事故は、ツアー前の自己の健康状態を偽った参加者の自己責任である場合が多いが、ガイドが付いていても事故が起きた。また、ガイドの数が増えるに連れ、ガイドの質が低下してくるのは避けられない。事故発生の際の応急処置法も知らず、単純に山に詳しい、あるいは数回縄文杉に登ったという程度でガイドになれる、という状況になってしまった。平均的な屋久島ガイドは、1年間に延べ500人の客を案内している。4月から10月までが繁忙期で、1年の大半の客がこの時期に集中している。ガイドの料金も各ガイド・業者によってまちまちで、なかにはガイドという名に値しない行動をする者もでてきた¹⁴。

それでは、ガイドとは一体何を案内するのか、その専門性は一体何か、どうした奉仕に対してお金を請求できるのか、といった根本的な問題を避けて通れなくなった。

2006年4月30日、縄文杉登山の途中で、木道で足を滑らせて死亡した事故があった。このグループは20人という非常に数の多い中高年登山であり、島外のガイド1名と添乗員2名がいたが、全員の状況をガイドが把握できる状態ではなかった。また事故の起きた現場が手すりのない木道部分で、以前から事故の可能性が指摘されていた場所であったことも重要である。しかしこのグループは、前日、日帰りで宮之浦岳往復をするというハードな日程を組んでいて、連日ハードなスケジュールをこなさざるを得なかったという無謀なものだった。

こうした事故は事情の分からない島外ガイドと旅行社の責任で、地元のガイドはそうしたへまはしない、ということができるだろうか。一人のガイドで数多くの人数を連れて行く場合¹⁵、参加者の間で当然体力差があり、グループがばらけるし、場合によってはそれ以上動けなくなる参加者が出てくる。そうした場合、ガイドはどうすべきなのか。「その場で待っているように」、という指示を出す場合もあれば、「一人で帰れ」という突き放す場合もあった。「朝日新聞」1999（平成11）年11月15日号は、「事故に不手際！、料金高い！、屋久島ガイドに苦情相次ぐ」という記事を載せている。

2-2 町認定ガイド構想の挫折

こうした状況を受けて、1998（平成10）年、上屋久町（柴八代志町長）は、2000（平成12）年に予定されている世界自然遺産会議の前に、屋久島ガイドの公認制の方針を打ち出した。当時すでに、40人あまりの者がガイドとして働いていた。柴町長の方針を受け、日本山岳連盟の公認登攀ガイドの資格を持つ太田五男氏を中心に、屋久島ガイドの基本方針が打ち出された。その方針は、「世界遺産登録後観光客の増加で“にわか”ガイドが増え、質が低下し、さまざまな問題が発生しているので、屋久島ガイドの資質を向上させる組織化が必要である。緊急技術などが一定のレベルに達した者だけを町が認定する」

というものであった。こうした方針の下に、太田氏の指導の下、事故を想定した山岳救助訓練が二回行われた。

当時、太田氏も福岡での仕事を退職し、屋久島に移住し、ガイドの仕事をする会社を経営していたが、自分よりも若いのが、ガイド業としては早い時期から営業をしていたベテランたちに声をかけ、自分に協力するよう呼びかけた。だが上屋久町の構想する屋久島ガイドは、こうした人々の賛成を得ることができなかった。反対派は、「屋久島の自然は多様なのに、山岳ガイドだけを基準にしたガイド認定制度に反対」し、「屋久島ガイド連絡協議会」（松本毅会長、以下40人）を結成した¹⁶。

この町認定ガイド構想をほぼ完全に実現した試みが、北海道でなされた。道は2002年、「アウトドアガイド資格制度」を発足させ、①山岳、②自然、③カヌー・ラフティング、④トレイルライディング、⑤乗馬、の5分野で資格認定制度を発足させた。2005年までには、延べ455人が資格を取得したが、問題もでてきた。

まず、資格をとっても、あまりメリットがないということが指摘された。個々のガイドが営業をする際、道認定のガイドという資格があまり評価されない、ということが挙げられる。資格を持っていても、お客の前でその事実を積極的に明示しない認定ガイドが多数いた。逆に利用する側から見ると、あまりにもガイドの数が多すぎて、一体どのガイドを選んだらいいか分からない、という不満も聞かれた。さらに、道の財政危機がこの制度の行方に暗雲を投げかけている。道は制度の運営をしている道アウトドア協会への補助を打ち切り、資格検定試験の委託費もさらに圧縮する方針で、この制度の運用が危機に陥っている¹⁷。

行政が主体となった屋久島ガイド構想は、ガイド内部の意見一致が見られずに挫折した。仮に町認定ガイド構想が実現していたとしても、それがうまくいったかどうかは分からない。ただガイドの問題に一石

を投じたことは事実である。

そうした中、屋久島でのガイド業を震撼させる事件が起きた。2004（平成16）年5月、鯛の川（たいのこ）上流部の沢登りで客4人を案内していた熊本県のガイドS氏（日本山岳連盟認定ガイド）が、客3人を死亡させるという大事故を引き起こした。一行は5月2日から遡行を始めたが、雨脚が強まり、5月3日遡行を止め、下降に変更した。しかし、川を渡っている途中で客全員が流され、3人が死亡、1人が重傷を負った。

この事故の問題として、「S氏は地元のガイドではない、地元のガイドなら天候の急変はすぐに分かる」という受け止め方が多い。しかし、S氏は日本山岳連盟の認定ガイドであり、屋久島の沢登りの経験は豊富であったが、それでも事故を引き起こしてしまった。さらに、S氏はお客に保険をかけておらず、このことの重要性を地元でも認識すべきである¹⁸。S氏には執行猶予のついた実刑判決が下されたが、被害者への補償という重大な問題は未解決のまま残されている。

3 登録・認定ガイド制度の発端

3-1 「エコツーリズム推進」と登録・認定ガイド制度

屋久島のガイドが組織化されるようになったのは、環境省が平成16～17年度に「屋久島地区エコツーリズム推進モデル事業」を実施し、その一環として屋久島におけるエコツーリズムの推進のために、上屋久町・屋久町両町が中心となり関係16団体が参加する「屋久島地区エコツーリズム推進協議会」（以下協議会と略称）が設立された。「協議会」は、エコツーリズムの牽引者として島内ガイドを位置づけ、「屋久島ガイド登録・認定制度」を発足させ、屋久島を楽しむメニューの豊富化、利用の分散による山岳部への負荷の軽減、里の資源を利用し

たツアーの開発をめざした¹⁹。

「協議会」の下に、「屋久島ガイド登録・認定運営委員会」が設置され、「登録・認定ガイド」の受付をするほか、ガイドへの苦情の処理やホームページの運営をする。さらに、「審査部会」が具体的な個々のガイドの登録・認定を審査する²⁰。

こうした制度的な整備に達するまでに、2004（平成16）年10月から2005（平成17）年9月までの間に実に16回の作業部会が実施され、総会、臨時総会を経て、多くの議論が重ねられ、コンセンサスが得られた²¹。屋久島観光協会長の柴鉄生氏は、「あの個性豊かなガイドの人たちが、よくここまで粘り強く話し合いを続けてきた」と、こうしたコンセンサスに達した事実を評価している。

屋久島ガイドになる条件は、①屋久町・上屋久町に2年以上居住している者、②保険の完備、③救急法の受講、④各種関係法令や屋久島の基礎知識に関する講習の受講、などを具備していることが挙げられる。またツアー内容やガイド活動などの情報公開とガイド活動におけるルールの遵守も義務付けられている。

こうして始まった「登録・認定ガイド制度」であるが、2006年3月現在、91名のガイドが登録された。登録には2万円の登録料が必要であり、書類不備で登録できなかった者、この時点で2年間の居住暦を満たしていない者など、2006年8月時点で登録待ちの状態の者を入れると、140名の登録ガイドが存在している。さらに今後登録を目指す予備軍を入れると、200名前後のガイドが屋久島には存在することになる²²。認定ガイドとは、登録されてから一定期間を過ぎたベテランのガイドに与えられる称号である。また、いったん登録されても、定期的に更新をする必要がある。

3-2 登録・認定ガイド制度の問題点

だがこの制度にいくつかの「欠陥」が認められる。現実に屋久島で

営業しているガイドの中で、「すべての」ガイドがこの制度を認め、登録をしているわけではないことである。

まず、自分の意思で登録を拒否している太田五男氏の場合が挙げられる。前節で指摘したように、屋久島ガイドの認定制度の最初の構想は、太田五男氏が始めた。ところがガイド内部の意見一致が見られずに、その構想は挫折した。太田氏は爾来、他のガイド業者と一線を画し、独自の路線を進んできた。環境省が推進するこの事業に最初から太田氏は参加していない。また、このガイド制度は「エコツアー推進」を謳い文句にしているが、「エコツアー」なる名称の下に、屋久島におけるほとんどあらゆる野外活動が実施できるようになっている。

各ガイドは自分の得意分野を申請するようになっているのだが、山、森、沢、川・滝、海、生き物、民俗などの領域から複数の分野を申請するのが普通である²³。しかし各ガイドが申請した分野でどの程度の知識と実力があるかは、ホームページ上からは読み取れない。特に、山岳、沢登りといった分野では、特別な技能と実績が要求されるが、太田氏のような経験のある山岳登山家をいわば排除するような形で進行してきた「屋久島ガイド登録・認定制度」には不備があるということができるのではないか。ガイドの中にも人間模様が存在することは事実だが、公平さを欠いた運営はこの制度の将来にも悪影響を及ぼすのではないだろうか。

ガイドの中には、沢登りを案内するガイドもいる。本格的な沢登りには、ザイルやハーケンなどを利用する高度な技術が要求されるが、そうした資格を持っているガイドは少ない。あるガイドさんの所属している会社では、「西部林道域の沢を登り、淵で泳ぐ」案内をしているが、ザイルは使わないようだ。2年前の鯛ノ川遭難事故のような大事故はもはやあってはならないが、このまま放置していると、再び事故の可能性は否定できない。実際、沢登りの際、転落事故を起こし、ヘリコプターの出動を扇いだという事故も起きているのである。

屋久島ガイドの資質を上げるためには、他の資格と連動させ、ガイドの実力、実績が目に見える形でお客に提示できるシステムを作ることが必要とされている。こうした意見に対して、前述の作業部会では、「それではそのような資格を持たないガイドの営業権を侵害する」、という意見も寄せられているが、悪平等を助長することになるのではないのか。

つぎに、登録を望んでいるが、受理されないK氏のようなケースがある。屋久島の自然に魅せられたK氏は、1996年屋久島に移住し、ナチュラルリストとして活動してきた経歴を生かしてエコツアーガイドの会社を98年設立した。

K氏のユニークなところは、「救助犬」を連れてお客を案内することである。K氏が救助犬育成で実績があるのは事実であるが、国立公園内に事故もないのに日常的に犬を連れて行くことは国立公園法に違反している²⁴。多くのガイドがK氏の行動に眉をひそめ、中には公然と批判する者もいる。そのために、日ごろから他のガイドと衝突がたえず、山中、お客のいる前で殴り合いの喧嘩に発展したこともある。2006年8月には、警察が現場検証をする事件も引き起こしている。

こうしたK氏も登録ガイドの申請をしたのであるが、「ガイド活動におけるルールの遵守違反」を理由に、登録を拒否されている。しかし、K氏のガイド活動にはなんらの制限もないのが実情であり、「あとは良識に任せる」、ということではかない。

さらに、ガイドの登録には、あるいは継続には、鹿児島県環境文化村で実施される屋久島セミナーに、定期的に参加することが義務付けられている。このセミナーは、館長である田川日出夫元鹿児島大学教授の意図が大きく反映されている。植物生態学者である田川氏の好みのせいか、講師は植物学や動物学に極端に偏っている。

それ以上に、ガイドの資格としてこうした外部講師の学問的な話を聴講することが義務付けられていることのほうが重大な問題である。

一体、屋久島のことを語る主体は誰であるのか、という疑問が生じる。登録・認定ガイド制度は、地元で山の仕事をしてきた人々が「道案内」として、例えば縄文杉登山を案内する、という仕事を奪ってしまった。こうした人々は、屋久島の学問的な位置づけについては無知ではあるが、経験的な体験を語ることはできる。しかし、学問的な裏づけのほかに、無線の資格などを持つことが有能なガイドの条件であり、山中で他のガイドとたえず無線連絡を取りあって仕事をするのが能力のあるガイドの姿であるという言説が幅を利かせてきた現在、経験のある地元の間人が屋久島のことを語る機会が奪われてしまった。

登録ガイド制度では、里のエコツアーということも重視されているが、経験ある地元の人々は、語り部としてのみ位置づけられ、こうした人々が主体的にガイド業を行なう可能性が実質閉ざされてしまった。ガイドが研修を行ない、たえず相互の啓発を行っていくべきであることは確かではあるが、ガイドによって語られる屋久島というものが、外部の、あるいは学問の言説だけで完結していいわけがない。

登録ガイドの8割が実は移住者である。そのために、屋久島のこともよく知らないガイドが増えるのを防ぐために、屋久島への居住暦が2年以上という要件が設けられたのであるが、外から見た屋久島像だけがこれからますます幅を利かせていく、という事態に私は危惧を覚える。彼らは屋久島が世界遺産に指定されてから移住してきた若者が大半である。そうした中から、ガイドという職業を選択していく道が開けたことは、移住者であれ、屋久島出身者であれ、平等な就業機会を与えているとは言えるが、ガイドとして何をお客に語るのか、という根本的な問題が生じる。登録ガイド制度が進行するとともに、屋久島の語りは標準化され、従来地元がもっていた可能性が消されていくことを恐れる。

4 屋久島ガイドの未来——提言

屋久島ガイドが今後屋久島の環境保全に貢献しながら、職業としてのガイド業を持続的に発展させていくためには、いくつかの課題が挙げられる。

まず、増加する観光客を分散させる努力を今後も継続していくことが重要だが、それには、ピーク時の観光客の利用を制限することが是非必要となっている。例えば、ゴールデンウィーク時の縄文杉登山を制限することが必要だと思われるし、法的には可能である²⁵。

朝日新聞2003（平成15）年4月28日号には、「入場制限で自然守る」と題されて、尾瀬、知床、小笠原などで、最高1000円の手数料を取って入場を制限する仕組みが検討されていることが報じられている。白神では世界遺産指定地内での立ち入り制限を行なったため、地元のマタギなどの生活が圧迫される事態となり、こうした制限は不評であった。だが白神とは事情の異なる屋久島では是非実現して欲しい。環境省屋久島自然保護館事務所に問い合わせると、そうした施策に積極的ではないのが残念である。

屋久島では屋久杉ランドと白谷雲水峡で、「協力金」という名目で利用者から実質上の入場料を徴収している。その資金で遊歩道の整備、風倒木の除去などの作業を実施しているが、縄文杉登山では、トイレが汚すぎて女性が困っているのが現状であり、その解決策にも利用料の徴収と、利用者の制限が必要である。

また、屋久島の永田地区（田舎浜、前浜など）はウミガメ上陸日本で知られている。2005年11月8日には、田舎浜がラムサール条約に登録された²⁶。湿地の保護を謳うラムサール条約に海浜が指定されたのは前代未聞であるが、田舎浜の価値が国際的に評価されたことを素直に喜ぶべきであろう。

しかし、観光客の増加とともに、ウミガメの産卵、子ガメの孵化を

見るツアーが生まれ、一部のガイドは関係者の不評を買っている。鹿児島県の環境文化村もそうしたツアーを後押ししているから、始末が悪い。

ウミガメ産卵地は、鹿児島県のウミガメ保護条例で保護されているが、屋久島のように多数の観光客が事実上無原則に押しかける事態となってくると、問題点も見えてきた。永田のウミガメ保護ではNPO法人の「屋久島うみがめ館」（大牟田一美代表）が長い実績を誇っている。しかし、1996年「永田海亀連絡協議会」が発足し、毎年5月15日から7月末まで「ウミガメ観察会」を実施している。最初は前浜だけであったが、2001年からは田舎浜でも実施している。

この観察会は、予約制で一晩80人の定員が設けられてはいるが、実際は守られていない。また、大人700円、高校生500円の協力金を徴収している。パンフレットによると、ウミガメの保護、海岸の清掃などを謳っているが、その決算報告が明瞭ではない。そもそもこの団体は、永田地区とは無関係の任意団体であるが、行政当局はその存在を公認している。

問題は、ウミガメ観察のあり方である。ウミガメが上陸する時間はまちまちで、深夜まで待たないとならないこともよくある。また、7月末になると、ウミガメの上陸が極端に少なくなってくるので、1頭が上陸すると、先を争って「観察」が行なわれる。また、早い時期に産卵した場所の近くに産卵することもあり、そうした場所は立ち入り規制のロープが張られているのだが、上陸頭数が少なくなるとそうした規制線は無視して産卵地を踏み荒らす事態となっている。結果的には、こうしたウミガメ観察会が、子ガメの孵化を妨害するという結果になっている。

このウミガメ観察に、一部のガイド、民宿、ホテルが「ナイトツアー」と称して参加し、一晩に5,000～8,000円の料金を徴収している。このようなツアーで料金を徴収すると、ウミガメの産卵を見せることが目

的となり、その分、現地では何が何でも見せて欲しい、という圧力に転化する。そうすると、ウミガメの保護といった側面は後退し、自然観察という本来の目的はないがしろにされてしまう。見せるのであれば、もっと責任をもって見せて欲しいものだ。

屋久島の登録・認定ガイド制度は、環境省のエコツーリズム推進事業の一環として実現した。自公与党は、2006年秋の臨時国会に「エコツーリズム推進法案」を上程しようとしている²⁷。自然保護を図りつつ、観光（業者）と地元の発展の3つの条件を満たすべき新たな旅が「エコツーリズム」から生まれてくる、とのことであるが、法律まで通して実現すべき課題とも思われぬし、また現実にはそうした理想の実現には困難と矛盾が生じるだろうと予想される。

何をもってエコツーリズムというかという問題と、ガイドの目から見ると、エコツーリズムもマス・ツーリズムもそこには大差はないのである。多くのガイドが大手旅行社とタイアップしてお客を取っているのが実情であり、場合によっては20人以上のマス・ツアーを扱うこともある。そうした場合、数人のガイドをあてがうだけで、全体としてはマス・ツアー型と同じであり、自然に対する付加という点ではなんら違いはなくなる²⁸。

屋久島が今後「細く長く」生きていくためには、自然の過度な利用は絶対に避けなければならない。総量規制という方針を早く実現すべきである。ガイドという職業の誕生が、そのような屋久島の持続的な発展にどのように貢献できるのか、そこが問われている。

注

- 1 <http://www.mlit.go.jp/crd/chirit/pdf/genki/yakushima.pdf#search>
- 2 この論争の詳細については、拙著、「屋久島の環境民俗学——森の開発と神々の闘争」明石書店、1998年、終章「世界遺産という怪物」203 - 15ページ参照。拙論「開発と環境の人類学——共生と持続性をめぐって」『新訂 文化人類学——文化的実践知の探求』江淵一公・松園万亀男編、放送大学振興会、2004年、88 - 92ページ参照。また、放送大学放送授業「文化人類学」（04～07年度）第6回「開発と環境の人類学——共生と持続性をめぐって」の屋久島における開発と自然保護をめぐる議論を参照のこと。
- 3 注1のURL参照。屋久島への観光客の正確な数は分からない。そこで、空港、港の年間利用者数（入り込み数）で推定するしかない。この数字には観光客と同時に島民の数字も入っているが、島民の利用数は、そう増加していないはずである。2006年（平成18）年は、「前年世界遺産に登録された知床ツアーを旅行社が多数組んでいるため、屋久島への旅行者は少ない」としばしば聞いた。
- 4 林野庁屋久島森林保全センター発行の月刊ニュースレター「洋上アルプス」の統計資料による。
- 5 数年前から、屋久杉ランドよりも白谷雲水峡を訪れる観光客の数が多くなった。屋久杉ランドには大型バスで訪れるマス・ツアーの客が多いのに対して、白谷にはマイカーで入る客が多い。
- 6 2006年9月23日環境省主催の「エコツーリズムフォーラム」（東京ビッグサイト）での屋久島ガイドの中田隆昭氏の発言。
- 7 http://www.kikasete.net/marketer/mk_enqresult.php。
- 8 1986（昭和61）年4月創刊。1995（平成7）年、NTTタウン誌大賞受賞。
- 9 同上「フォーラム」での柴氏の発言。ホテル、民宿の中には、屋久島観光協会に入会しない施設もあるので、柴氏の発言はそうした施設を含んだ数字だと思われる。
- 10 宮之浦から、安房、尾の間（おのあいだ）に至る地域に屋久島の人口の8割は集中している。
- 11 こうした素泊まり型の民宿の中には、一人一泊2,000円～2,500円という値段を設定している民宿も現われていて、主に若い登山者の宿泊施設になっている。

- 12 太田五男「屋久島の山岳遭難」『屋久島の山岳—近代スポーツ登山 65 年の歴史と現在』南方新社、2006 年。
- 13 先の「フォーラム」での柴氏の発言。
- 14 山中でセクハラをする、植物を採集する、タバコを捨てる、他のガイドの悪口を平然と言うなど。
- 15 一人のガイドが最高何人まで案内できるかという協定はない。一人で 10 人以上の客を案内し、一日で 15 ～ 20 万円も荒稼ぎするガイドもいる。
- 16 「朝日新聞」1999（平成 11）年 11 月 15 日号
- 17 「北海道新聞」2005 年 11 月 14 日号。
- 18 屋久島自然史研究会 HP、2006 年 2 月 9 日号。
- 19 「平成 17 年度屋久島地区エコツアー推進モデル事業業務報告書」平成 18（2006）年 3 月、株式会社メッツ研究所、1 ページ。
- 20 同 4 ページ。
- 21 同 13 ページ。
- 22 登録ガイドにならなくても、ガイドの仕事はできる。インターネットが駆使でき、旅行社とのつながりがあれば、十分営業していける。
- 23 ダイビングだけは特別な資格が要るので、海の案内ができるというガイドは他と重複することは少ない。
- 24 サル、シカが怯えて逃げ出すことがよくあるそうだ。また病原菌を野生の動物に移してしまう可能性も指摘されている。
- 25 自然公園法第 15 条では「特別地域内に特別調整地区を指定」可能とされている。
- 26 平成 14（2002）年 2 月 19 日、霧島屋久国立公園の公園計画の変更があり、田舎浜、前浜、白谷雲水峡などが国立公園に編入された。
- 27 前述の「フォーラム」における盛山正仁衆議院議員の話。
- 28 前述の「フォーラム」で、屋久島ガイドの中田隆昭氏は、修学旅行で白谷雲水峡を訪れた学校のことを紹介している。「たとえいくつものグループに分かれて歩いたとしても、総数は変わらず、自然への負荷は大きい。また白谷の遊歩道が年々整備され、今では 3 人が並んで歩けるほどに拡幅されていることは、自然の姿をゆがめる」と警告していた。